下野市立国分寺中学校

１　学校課題

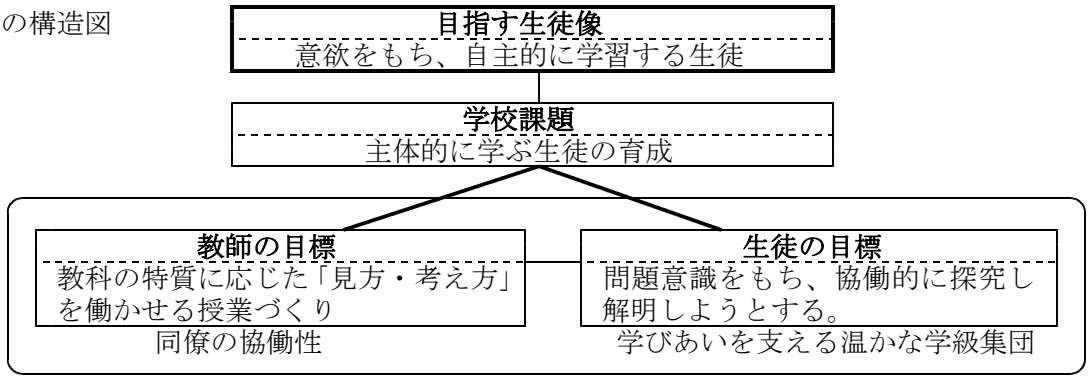
研究主題　「自己を見つめ主体的に学ぶ生徒の育成」
～自ら課題を見出し、探究心を育む指導の工夫～

２　研究計画

（１）研究主題設定の理由

本校では継続して「学びの共同体」の理念に基づいた授業実践を重ねており、ペア学習やグループ活動を取り入れている。そのような活動の中で「何が分かったか」「何ができるようになったか」を確認していくと、「何が分からないのか」「何ができないのか」など、多くの生徒が自分自身の学習状況について把握できていない現状が見受けられた（メタ認知できていない）。そこで、学習過程において生徒自身が自分の学習状況を把握できるように工夫することで、自分の課題を見出すことができるようになったり、その課題を解決できるように教師が支援していくことで、生徒が主体的に学び見通しをもって粘り強く学習に取り組んだりできるようになるのではないかと考え、研究主題を設定した。

（２）研究の構造図



（３）研究の具体

・多様な他者との学び合いを大切にした対話場面の設定
・「自己を見つめる」場の設定。自己の課題を見いだすことができるような発問やワークシート、確認テスト等の工夫
・深い学びの成立のための振り返り（毎時間の振り返り、単元や題材のまとまりとしての振り返りなどの工夫）

３　研究内容

（１）「学びの共同体」の理念を基にした授業づくり

①主体的な学び　　②対話的な学び　　③深い学び

次のような学習観を教師同士が共有した。

１時間の授業の中に、「活動（個人作業）」「協働（グループ活動）」「表現の共有（対話）」を有効に活用することによって、生徒の学びを深化させ、質の高い学びを成立させる。

（２）同僚の協働性

全教員が授業を見せ合い、教科を越えて日常的な授業を他者に開く。
（一人一公開授業、授業デザインの作成）

（３）温かな学級集団を支える教師と生徒とのよりより関係

教師が、授業や学校生活において生徒の気持ちを共感的に捉え、ケアを軸として指導した。

学力向上改善プラン具体策の実施に向けてのプランを共有し、年２回の授業アンケートを実施した。生徒が評価した結果を数値化することで、自分の授業を生徒がどのように感じ取っているか考察し、授業改善につなげた。

（４）授業研究会の充実

今年度は、３回の校内研修（自主公開を含む）を行った。

授業研究会研修内容

月	実施内容　および　授業研究会（授業、協議、講話）を通して
4	学習指導における共通理解
6	第１回校内研修　　Ｓ＆Ｕコラボ事業 【３年社会】きまりの意義を理解し、問題（対立）を解決するためのきまりを考えよう （宇大　熊田禎介先生からのご指導） ・グループ活動で話し合い、意見を次々と出させることができた。 ・教師は机間を周りながら、生徒のつぶやいた疑問に簡単に答える程度で余計な発問をしなかったことがよかった。 ・教師が生徒に任せることによって、生徒同士で助け合うことができた。 ・見方・考え方は、単元毎に鍛えられていく。 ・「主体的な学び」をどのように見取っていくかについてのお話をいただいた。
１１	第２回校内研修　　Ｓ＆Ｕコラボ事業 【１年道徳】思いやりについて考えよう （宇大　上原秀一先生からのご指導） ・導入から自分のこととして捉えることができた。 ・ICT の活用（導入、最後に動画で再確認）が効果的であった。 ・いろいろな「思いやり」に気付けてよかった。 ・道徳の中でも、自分の担当教科を大事にしてはどうかというアドバイスをいただいた。 ・価値観は一人一人違ってよい。 ・毎年授業の蓄積をして学校現場で研究していくことが大切。
１２	第３回校内研修　　自主公開研究会（全クラス公開授業） 【焦点授業２年数学】星形多角形の角の和を求めよう 講話　探究と協同の学びのイノベーションへ ～学びの共同体の挑戦～ 東京大学　佐藤学先生 ・生徒がつぶやいて学び合うことができていた。 ・１人も諦めずに課題に取り組めていたのは、教師が生徒の邪魔をしていなかったからであり、教師の言葉は最小限でよい。 ・全クラス授業巡回をした中で、どの教科でも学び合えていた。 ・分からなかったら「分からない」ということは大切である。 ・学力の向上のためには、子どもが学ぶことを好きにすればよい。下から積み上げるよりも、上から引き上げることが大切である。 ・PC の使い方によっては深い学びには適していない。学びは協同でやることで意味がある。→今後の ICT 活用法の研究へ

４　本年度の成果と課題

（１）研究の成果

年間を通して、「主体的に学ぶ生徒」を育成することを意識し、様々な実践ができた。

今年度は、「自己を見つめ」という生徒自身の学習への向き合い方に視点を置くことで、生徒自身が１単位授業の中でどのような課題をもち、どのように見通しをもって取り組んでいけば課題解決できるかを考え、授業をスタートすることができた。教師は、生徒の学びを支える立場であるため、言葉は最低限に留めることが大切だということが分かった。これにより、生徒一人一人の学びや生徒の学び合い活動がより深まることが顕著であった。各研修により、その後の授業での新たな工夫や挑戦、生徒へのアプローチの仕方等、実践によって改善していくことができた。

また、生徒の学びを支えることを意識した授業づくりが主体的な学習活動へつながることを再認識した。

（２）研究の課題

自己を見つめることができても、生徒自身が自分の振り返りをもとに、どのように次の課題へつなげていくか設定することが難しいこともある。振り返りシートやワークシート等の工夫や教師による適切な支援が必要である。

来年度は、年度の早い時期から一人一公開授業を実施し、特に「ジャンプ課題」から「基礎の定着」を図ることや、「ジャンプ課題」による振り返りについても研究を続けていきたい。より質の高い指導を目指すために教科部会で情報を共有し、研究を続けていきたい。また、今年度の実践から得られた成果や課題を職員間で共有し、他教科の良い点や工夫点を取り入れながら研究を続けていく予定である。